

連載

高大接続の課題に迫る

第2回

入学前教育の 課題を考える

今号では、教学面からみた高大接続の課題として、入学前教育の現状と課題について取り上げる。推薦・AO入試入学者の多くは9~11月と早期に合格が決まるため、入学時点での一般入試合格者との学習習慣や学力水準の差などが課題として指摘されている。これを予見したかのように、2000年11月の大学審議会答申『大学入試の改善について』では、AO入試に求められるものとして、「大学が入学前に行っておくべき学習準備等についてのアドバイスを行ったり具体的な課題を課す」「高等学校での学習と関連付けつつ入学準備学習を行わせる等により、学習に対する動機を維持し、入学までの期間を有意義なものとするよう支援していくこと」であるとの記載がある。入学前教育は15年近く前から、推薦・AO入試の普及に伴い、主に学習面での接続の解決策として提起されていたのだ。推薦・AO入試入学者の割合は、大学入学者の4割強、私立大学入学者では約5割という状況が続いており、課題は拡大しているにもかかわらず、入学前教育の最新の実態は必ずしも明らかではない。そこで本稿では、2013年11~12月にベネッセ教育総合研究所が行った「高大接続に関する調査」結果の一端を概観し、その課題を考察する。

今日の入学前教育

推薦・AO入試に伴う学習面の接続対策の実態と課題



ベネッセ教育総合研究所
高等教育研究室

樋口 健

ひぐち たけし◎民間シンクタンクで、教育政策や労働政策、産業政策等のリサーチ・コンサルティングに携わる。その後、ベネッセ教育総合研究所に移籍。大学教育を取り巻く諸問題に関する調査研究を続けている。

推薦・AO入試と併せて定着 入学前教育の実施率は7~8割

まず、2013年度段階での、全体としての実施状況を確認しておこう。

入学前教育の実施の有無を、入学予定者の入試方式別に尋ねたところ、推薦入試による入学者に対しては全回答学科の63.7%、AO入試による入学者に対しては同44.0%が実施している(図1)。ここから推薦入試・

AO入試を実施しない学科を除いてみると、推薦入試実施学科の69.6%、AO入試実施学科の79.4%が、入学前教育を実施していた。これに対して、一般入試やセンター利用入試など学力入試層に対する実施は7.6%である。

推薦入試・AO入試の方式は多様であるが、それぞれの7~8割は入学前教育を実施しており、これら入試方式と入学前教育の実施を、もはや

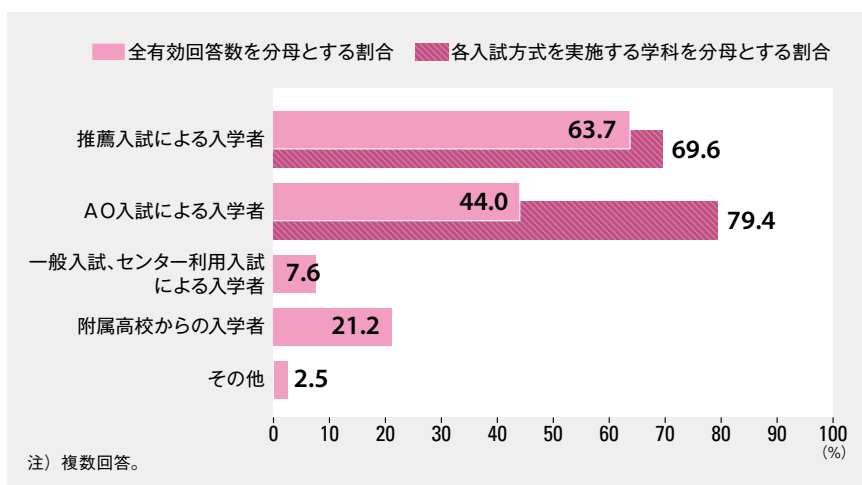
セットで考えている大学が多いことを示している。

入学前教育の内容は 6割が添削課題

その実施形態は、どのようなものか。推薦入試またはAO入試による入学者向けに入学前教育を実施している学科(1,402件)に対して、実施形態を尋ねた結果が図2である。最も多かったのが「学習課題の提出(添削あり)」(61.9%)であり、65.0%が必須受講となっている。近時、入学予定者向けの集合型の講座や授業も報じられることがある。しかし、その実施率は35.1%である。遠隔地の入学予定者に対する配慮も必要ということだろうか。結果的には、地域を選ばず、課題遂行に対する一定の強制力を持ちながら、学生の課題を把握し、コミュニケーションも出来る添削型課題が実施しやすいということだろう(図2)。

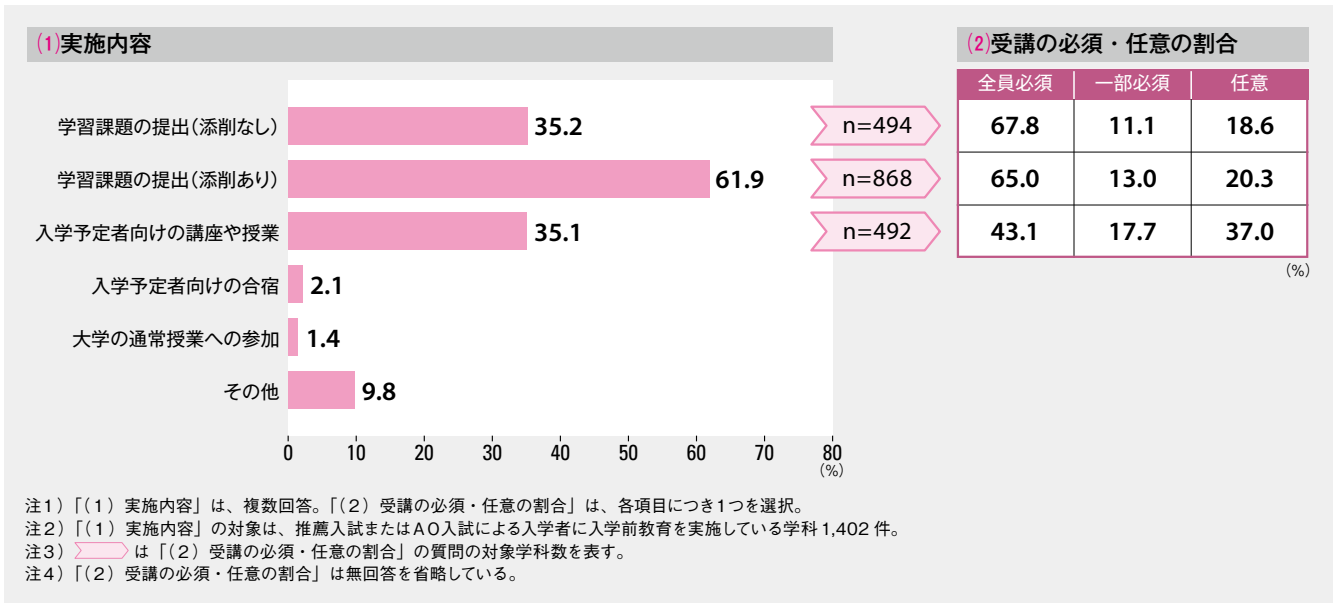
一方、入学前教育の内容を、高校の教科・科目でいうとどれに当たるかとの問いに対しては、上位3項目として国語、数学、英語のいわゆる高校の必修科目がいずれも4割弱。次いで、物理、化学、生物がいずれも2割弱で続く。分野別にみると理工学系統では数学が突出して多く、医・薬・保健系統では生物であり、分野の特性が表れていた。リメディアル

図1 入学前教育の入試方式別実施率



ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査」調査概要 ●調査テーマ：高大接続の実態・課題をとらえる ●調査方法：郵送法による質問紙調査 ●調査対象：全国の高等学校の校長(全国の全日制高等学校のリストより、無作為に学校を抽出)、全国の大学の学科長(全国の学部・学科リストを利用し、その全てに配布。ただし大学院大学、放送大学、通信制のみの大学、社会人が主な対象である学部・学科等を除いている) ●有効回答数：高校1,228件(配布数2,500通、回収率49.1%)、大学2,012件(配布数5,060通、回収率39.8%) ●調査時期：2013年11月~12月 ●調査項目：【高校・大学共通項目】大学入学者に求める力・高校で育成している力/高大接続の意識/今後の高大接続像/現在の改革に対する賛否 など 【高校】進学者の実態・課題/進路指導の課題/大学入学者選抜に対する考え方/新課程下の変化 など 【大学】1年生の実態・課題/入学者選抜の実態・課題/高大連携/入学前教育/リメディアル教育/初年次教育 など

図2 入学前教育の実施内容



の色彩が強いのかもかもしれない(図3)。

入学前教育の狙いと効果

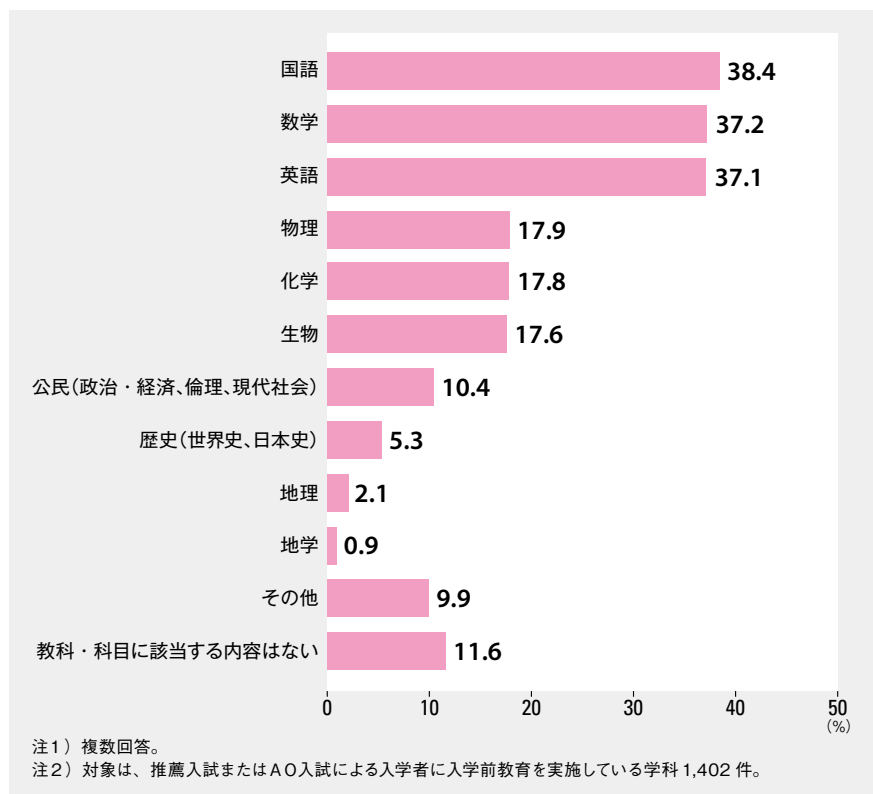
では、入学前教育はどのような狙いで行われ、その効果についてはどう見られているのか。そこに潜む課題について考察を進めたい。

まず、狙いとして最も多かったのは「入学までの学習習慣の維持」(76.3%)、次いで「高校までの基礎学力の補強・向上」(68.0%)、「大学での学びへの動機づけ」(60.3%)と続いていた(P.22図4)。

なお、この上位3項目は、学部系統別に見ても、順番の入れ替えはあるが、項目自体の変化はない。つまり、全体としてみると、早期に入試が終了し、学力不問が指摘される推薦入試・AO入試を通して入学までの学習面の課題はこの3点の認識に集約されているとの証左であろう。

その効果はどうか。実態は、筆者の見方とすれば、なかなか厳しい。確かに、「大学での学びへの動機づけ」は60.3%が「効果が得られている」(「十分に効果が得られている」

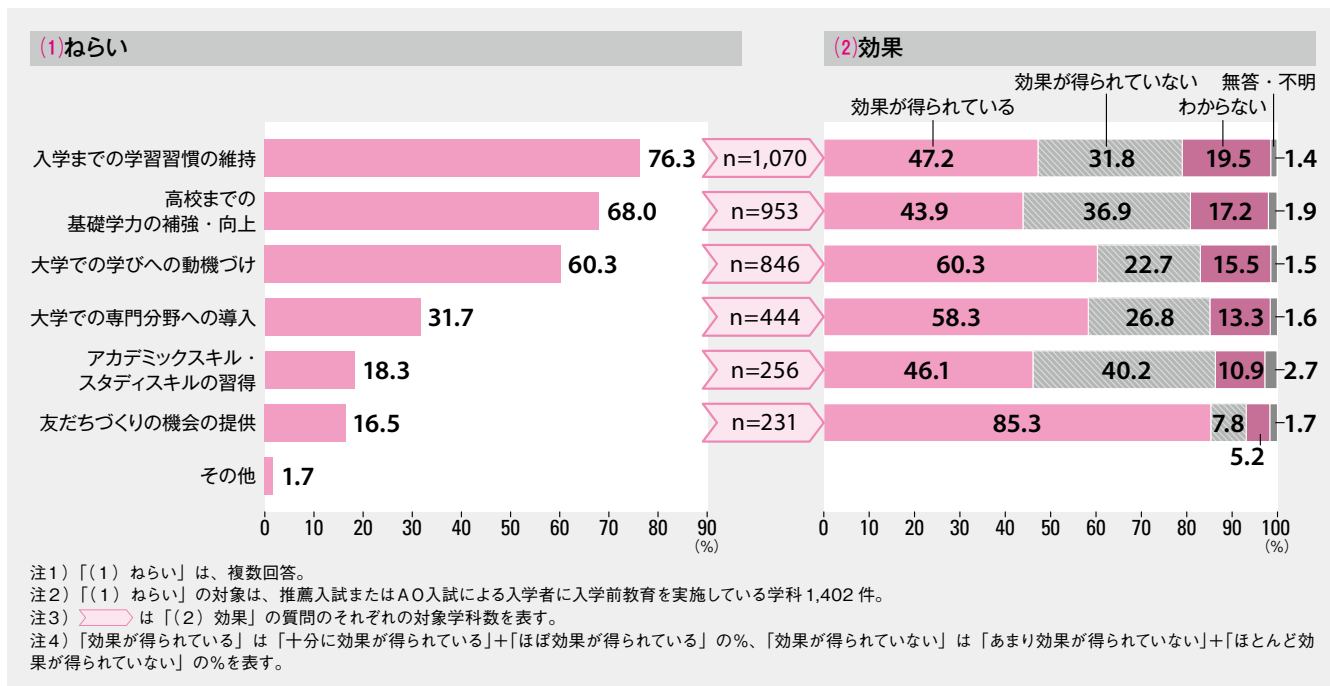
図3 入学前教育を実施している教科・科目



+「ほぼ効果が得られている」、以下同)と感じている。ところが、22.7%は「効果が得られていない」とし、15.5%は「わからない」との回答である。一方、「入学までの学習習慣の

維持」や「高校までの基礎学力の補強・向上」もそれぞれ47.2%、43.9%が効果を感じている。しかし、3割以上は「効果」を感じておらず、2割弱は「わからない」としている。

図4 入学前教育のねらいと効果



すなわち半数は効果が認められていないのである。(もっとも、事業評価を明確に把握していない可能性もあり、その点の留意は必要だ。)

目的意識を喚起させるような入学前教育を

これから始まる4年間の学びに思いをはせ、目的意識・学ぶ意欲を喚起する「わくわくするような」入学前教育を「仕掛ける」必要はないのだろうか。

ここで着目したいのは、「大学での専門分野への導入」である。狙いとして掲げる割合は31.7%と上位項目の半数程度である(図4)。しかし、効果が得られているとする比率は6割に近く、「入学までの学習習慣の維持」や「高校までの基礎学力の補強・向上」よりも大きく上回っている。

考えてみると推薦入試、AO入試は、もちろん基礎的な高校学力習得を前提とはするが、大学での専門・研究に対する問題意識や研究能力を期待し、総合的に評価して行う選抜

だ。その彼らによりフィットする入学前教育とは、学力のマイナスを埋める発想を前面に出すのではなく、来るべき学習・研究の一端に誘う学習内容こそが、その意欲や目的意識を一層高めることが出来る。その中で、付随する不足する学びを埋める努力を自然に埋め込む方が、彼らにとって学ぶ必然性も高いのではないか。既に「学びの動機づけ」を狙いとする比率は高いのだから、それに専門的な学びへ誘う入学前教育と補充教育をどうバランスよくミックスさせるか、一層の工夫が求められているように思う。

現状の課題意識では「入学前教育と入学後の学部教育の内容が接続していない」との回答は3割程度だ(図5)。とすると、7割は入学前教育と専門とは接続しているということだろう。しかし、狙いとして専門への導入を掲げる学科は3割に過ぎない。ここからは果たして、例えば、今後期待される学問領域であるバイオマス・エネルギーの研究を希望する学

生にとって本質的に必要な物理、化学、生物の基礎知識とは何かが精査されているかどうかは分からない。また、看護学を学ぶ上で本当に必要な物理や化学の単元は何か精選されているだろうか。既に、我々が過去に実施した学生調査からは、学生の学びへのモチベーションを最も下げる授業は単なる高校科目の焼き直しであるリメディアル科目であることが、明らかにされている。

このような視点から、今一度、入学前教育とその後の専門とのつながりを再考するのが課題ではないだろうか。要は、これから始まる4年間の探究的な学びに対して、学生の目的意識と学ぶ意欲をかき立てる、「わくわくするような」(しかし極めてまじめで、これからの探究に必要な学びを体系立てた)入学前の学びと教材はどのようなものか今一度創案してみよう、という筆者の仮説的な提案である。加えていえば、硬い文章の解説と教材だけでなく、先輩たちからの軽いタッチの研究や大学生活

の紹介をもっと織り込んでよいのかもしれない。それが、入学後のピアサポートにつながる土台となる可能性もあるからだ。

今こそ高校と大学が共同し知恵を出し合おう

ここまで課題を指摘した。だが、もちろん大学も努力はしている。図6では、46.4%が「入学前教育の成果と課題の検討」を実施していると回答している。しかし、その一方で、既出の図5では、44.4%とほぼ同数が「どのようなプログラムや取り組みが有効なのかかわからない」と回答している。この要因の一つとして（これは入学前教育に限った話ではなく、高大接続の課題全般にいえることだが）、高校側・大学側それぞれのコミュニケーション不足が指摘される。すなわち、高校生の学びの様子・将来への意識を大学側は知らないし、高校側も大学で行われる学問的知識を活用した探究的学びとはどのように行われるのか、互いを知らないという指摘である。

実際、入学前教育についても、高校側関係者との意見交換は14.0%しか行われていない（図6）。また、大学入学前にどのような教育が必要か高校との検討が十分にできていないとの問題意識は実に64.5%に上るのである（図5）。こうした大学側の認識の一方で、高校側（学校長）の実に8割が、「大学にはもっと入学前教育を充実させてほしい」と非常に高い期待を持っている（図7）。

学校長へのヒアリングなども交え、せっかく推薦・AO入試で大学を決めた高校生にはたゆまぬ努力を続けながら学問への意欲を高め大学でぜひ成長してほしいと願っている。入学前教育はそのための助走期間である。「高大共同」の土台は既に

図5 入学前教育の課題（内容面について）

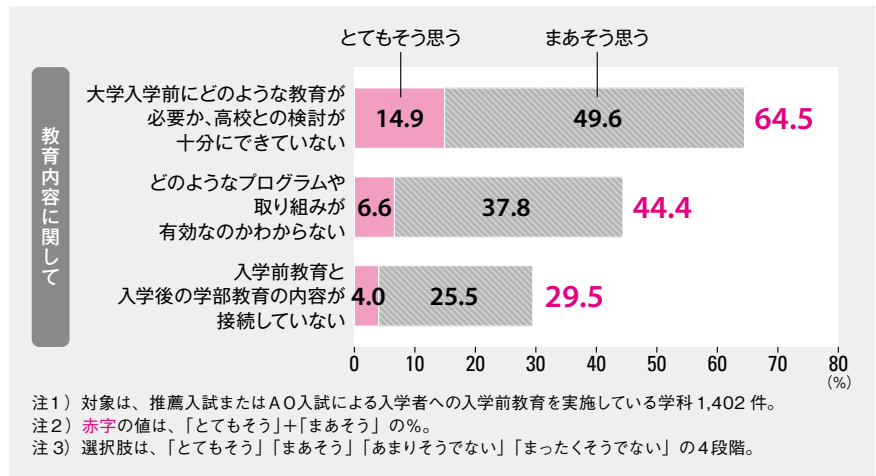


図6 入学前教育の検討・実施にあたって行っていること

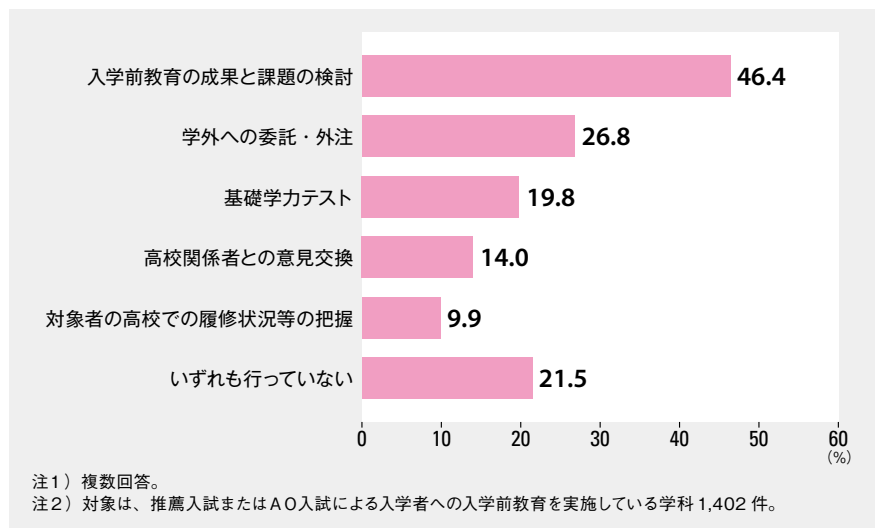
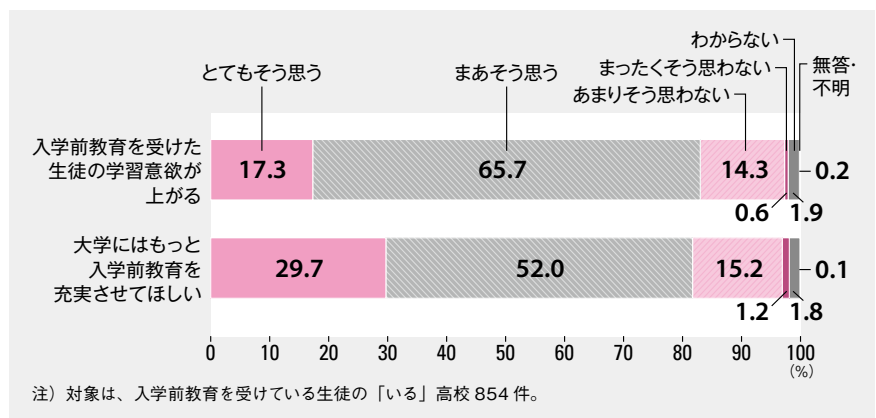


図7 入学前教育に対する高校側の意識



出来ている。地域の教育行政などの協力も得ながら、志願者獲得におい

て競合する大学間の垣根も越えた取り組みを期待したい。